

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言分布の解明に向けて

著者	大西 拓一郎
雑誌名	方言文法の全国分布と全国方言調査の将来像
ページ	19-24
発行年	2006-12-16
シリーズ	国立国語研究所研究発表会 ； 平成18年度
URL	http://doi.org/10.15084/00002963

方言分布の解明に向けて

大西拓一郎(国立国語研究所・研究開発部門)

1. はじめに

日本における方言分布に関する研究は、言語地理学の名のもと、1970年代から1980年代にかけて大きな潮流となった。そこに国立国語研究所の『日本言語地図』(LAJ)が大きな役割を果たしたことは、よく知られる。LAJのような全国規模の資料と全国各地で調査編集された多数の方言地図集の相乗効果があり、「方言学」＝「言語地理学」とも受け止められるかのような活気を呈していた時代である。

『方言文法全国地図』(GAJ)が編集出版を継続してきたのは、その少し後の時代になる。残念ながら、言語地理学は低調期を迎えていた。しかし、低調だったからといって、一時代前の黄金期に方言分布がすでに分析し尽くされていたわけではない。

確かに、分布の実態に関する資料はかなり提示された。また、それらに関する一通りの考察も行われた。しかし、分布が形成された原因に関する多角的なアプローチが十分になされたわけではない。また、多くの考察が依って立った仮説的理論が十分に検証されたわけでもない。別の見方をするなら、核心に至らないままに投げ出されてきたのが方言分布に関する研究である。

本発表は、そのような問題点に光を当てながら、方言の分布を解明するためには、何が必要で、どのような手段を講ずるべきなのかを考えることを目的とする。

2. これまでの言語地理学が明らかにしたこと

従来の言語地理学があげたもっとも大きな成果は、空間と時間に関係付けたことにある。いわゆる方言圏論(柳田 1930)とそれを理論化した隣接分布・周辺分布の原則(柴田 1969)である。繰り返し言われてきたとおり、空間距離に対応する時間軸尺度の相対的性質という弱点はあるものの、それを乗り越えるための試行もあった(徳川 1972)。これら、地理的配列に立脚する方法を「配列モデル」と呼ぶなら、その後の多くの分布研究は、配列モデルに依存するもので、小林(2004)は、文献との照合を通して、それを全国レベルで徹底的に展開させたものとして評価される。

3. 文法の分布

その小林(2004)も扱う文法事象であるが、先に記した黄金期においては、LAJが主に語彙を対象としたこと、また当初、文法事象が言語地理学になじまないことが懸念された(徳川 1979)こともあって、深く掘り下げられることは少なかった^{注1}。

配列モデルは、各分布の位置関係を最重要視する。実は、言語外情報として地理的情報を扱うといっても、扱うのはその並び方だけなのである。「サツマイモ」や「瀬戸物」の導入や流通を想定すれば理解されるように、言語外情報は、対象により多様である。

文法事象は、「文法」というものの性格から言って、対象にまつわる言語外情報はあまりない。言語中心に考察がかなり可能であり、その点から考えるなら、文法事象は、語彙における身体語彙や「やりもらい」などと同様に配列モデルの格好の対象なのである^{注2}。

4. 言語地図だけでは分らないこと

しかし、「文法の地図」であることを看板とする GAJ の対象項目すべてが配列モデルに好適であるとは限らない。とりわけ問題となるのは、第 6 集が扱った待遇表現である。むしろ、それぞれの地図に現れた個々の語形どうしの関係に関しては、配列モデルが適用できる余地はある。しかし、表現が有する待遇価と使用場面との関係を考察するには、各地域が持つ社会的特性への配慮が不可欠なはずであり、そのような観点から分布をとらえようとするなら、配列モデルはたちまち立ちゆかなくなる^{注3}。

そもそも取り扱う言語外の条件を地理空間的な位置関係だけに限定するのは無理がある。もとより言語外に存在する地理的情報は、位置関係だけでなく、自然条件(標高・河川・気候等)や人文条件(人口・産業・交通等)など、多様である。配列モデルに集約されていった方言の分布研究は、このような言語外情報との照合をどこかに置き去りにしてしまった。初期の言語地理学をふりかえるなら、河川や道路を盛り込んだ白地図を慎重に作成しただけではなく、学区と方言分布の関係を扱った馬瀬(1969)のような研究もあった。「人間」を呼び込む点に大きな魅力を持った言語地理学のはずが、発展とともに、扱いが煩雑で面倒な「人間」を排除していったというのは、何とも皮肉な展開である。

5. 地理情報の多角的分析

方言分布も含めて、多様な地理的情報を一手に扱うのは、困難さが予測される。最低限 2 次元で扱う必要のある地理情報は、複雑であるばかりでなく、データ量も大きい。分析にあたっては、当然のことながらスクラップ&ビルドの繰り返しが要求される。これを手作業で処理するには、多大な時間と人手が必要である。

地理情報システム(Geographical Information Systems; GIS)は様々な地理情報をコンピュータ上で統括的に処理していく技術と方法であり、20 世紀後半に急速に実用化が進められた。GIS では、地理情報のひとつとして、方言データも取り扱うことが可能である。方言の分布研究でも GIS を活用することで、諸種の言語外情報と方言情報(言語情報)の関係を多角的に分析することが期待できる。以下では、前節でふれた待遇表現に関して、言語外情報に基づく地域特性と方言分布の関係を見ていくことにしよう。

6. 待遇表現と地域特性

(1) 共通語形の分布

GAJ 第 6 集が対象とする待遇表現では場面を特定して扱っており、271 図「書きます(か)」では、非常に高い対者待遇場面における敬語形式の全国的な分布が概観できる(図 1)。共通語形と考えられるオ書キニナルや書カレルの類は、首都圏や関西圏に多いように見える。つまり、人口密度の高い都会に共通語形が現れやすいと、推測されるわけである。

図 2 では、GIS を用いてオ書キニナル・書カレルの分布と人口密度の関係を示した。オ書キニナルに注目すると、首都圏から関西圏にかけて人口密度が高い地域に現れやすいことが明瞭であり、全国共通語らしい分布を見せている。一方、書カレルはその傾向が散漫で、特に西日本では、都市部であるかどうかに関わらずまともりを見せ、西日本共通語的である。同じように共通語形と考えられながら、オ書キニナルと書カレルは性格に異なりのあることが、GIS を通すことで分析的にとらえられた。

(2) 身内(家族)への敬語

285 図・286 図「います(か)」は、自分の父親に対する表現を扱っている。現在の共通語では、父親に対して尊敬語(イラッシャル・オラレルなど)だけでなく丁寧語(～マス・デスなど)を用いることも少ないと思われる。全国的なようすを図3に示した。尊敬語の使用地域には明瞭なカタマリが見られる。西日本に広いつとも東日本でも会津地方にまとまる。紙幅の都合で省略するが、実はこの分布は、「近所の知り合いの人に対するやや丁寧な言い方」の分布(GAJ283 図・284 図「います(か)」)に類似している。

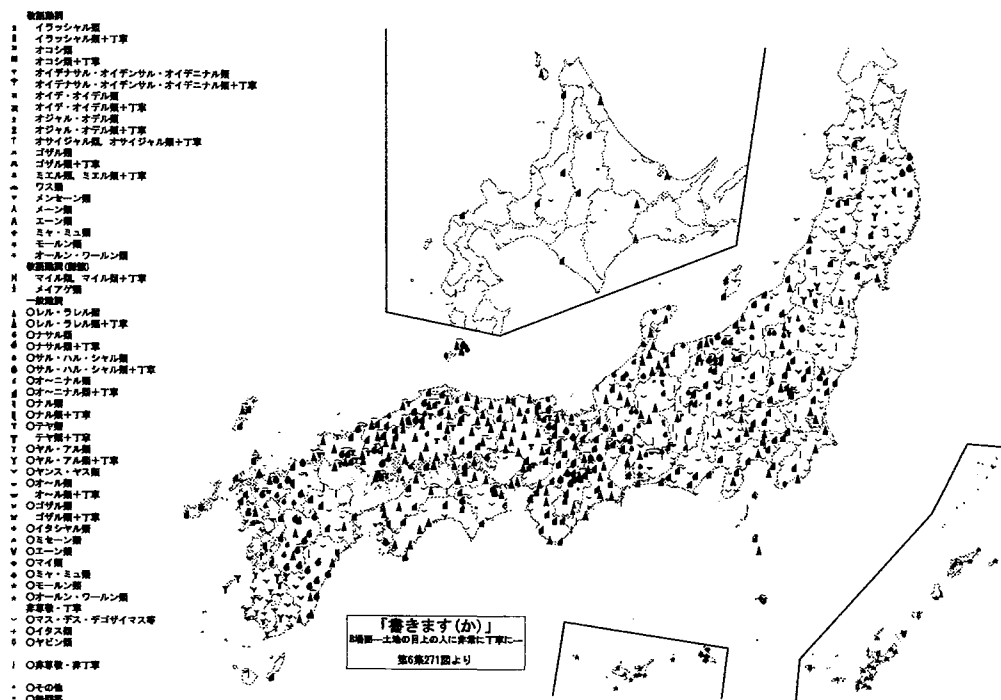


図1 「書きます(か)」—土地の目上の人に非常に丁寧に—

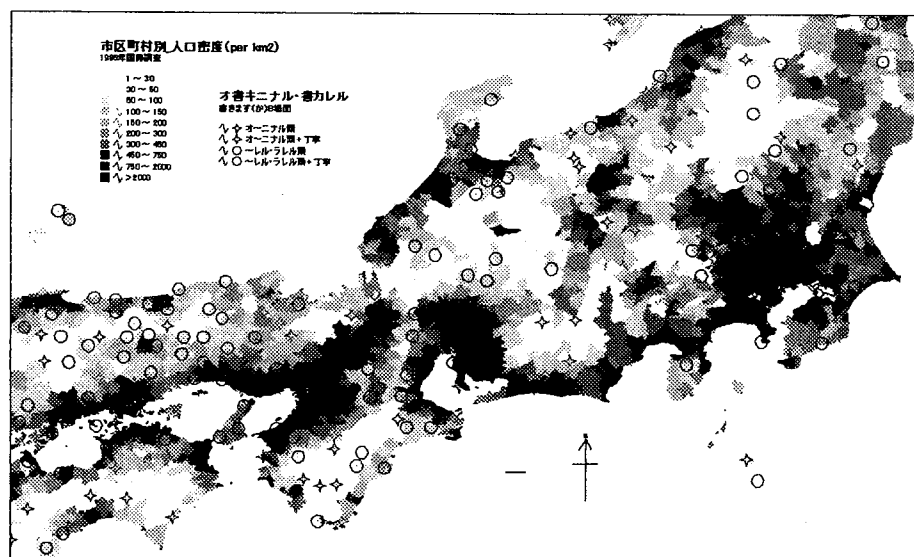


図2 オ書キニナル・書カレルと人口密度

図3が示す分布の背景には、各地地域社会の特性が存在していないだろうか。とりわけ、ここで考察しようとする身内に対する尊敬語使用には、家族のありかたの違いが関連することが予想される。実際、そのような家族構成のありかたには、民族差や地域差が存在し、それが客観的な数値に現れることが指摘されてきた(西村 1954)。

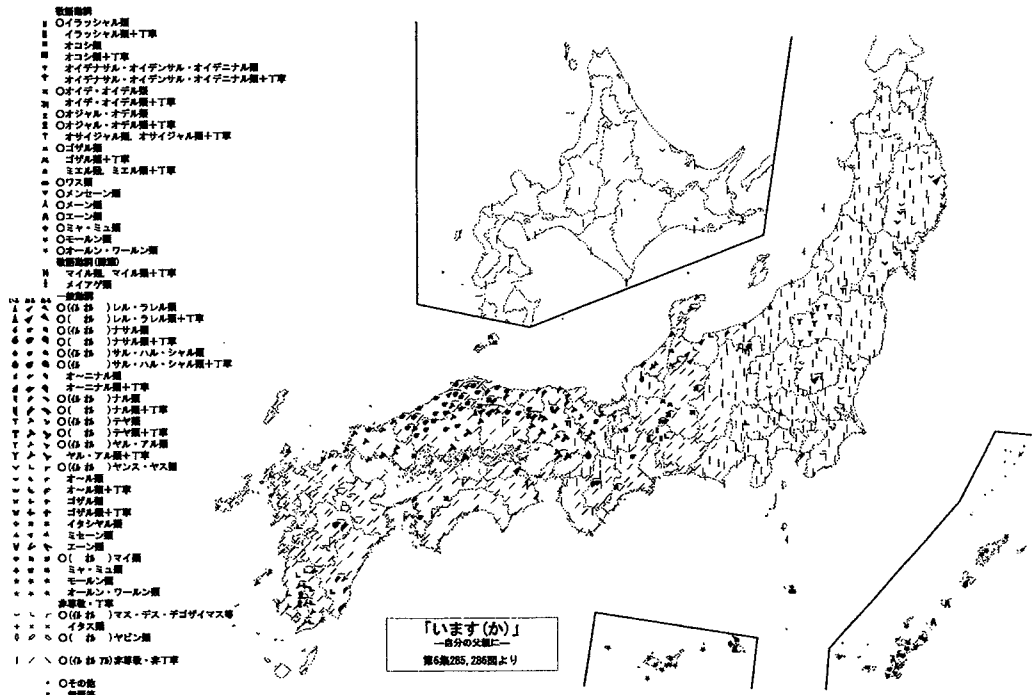


図3 「います(か)」—自分の父親に—

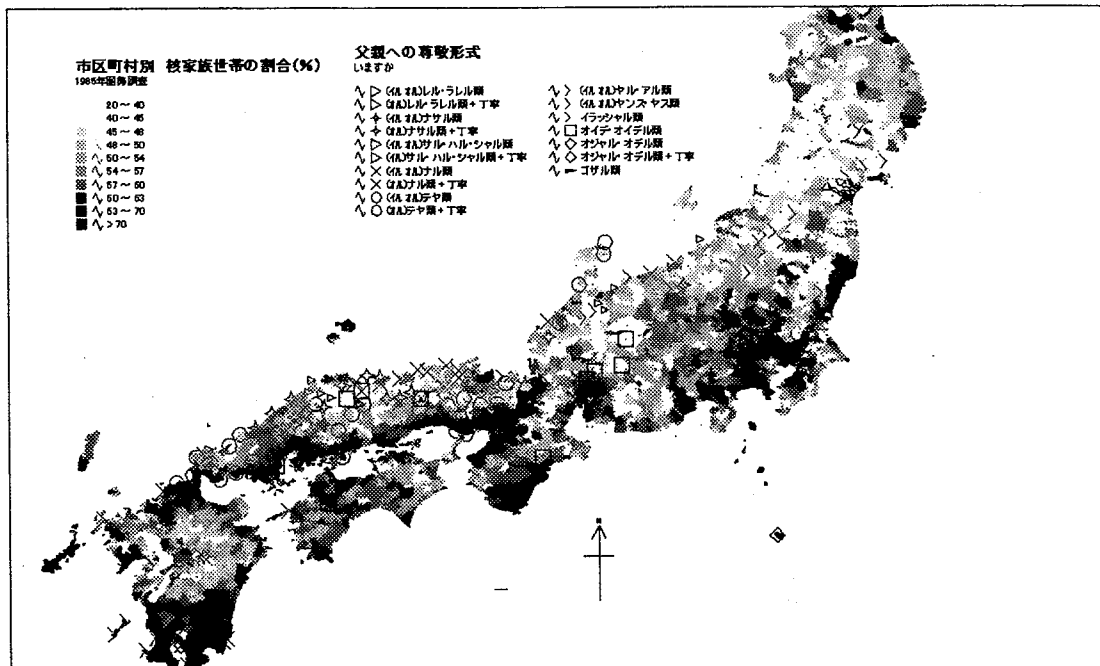


図4 父親への尊敬語と核家族世帯の割合

このように身内尊敬語の使用と家族制度が関わる理由を簡潔に記すなら、次のようになるだろう。小家族制の地域社会では、世代間の独立性が高い^{註4}。ゆえに、尊敬語の使用を決めるひとつの重要なファクターであるウチ・ソトに関して、小家族制地域では、血縁内であっても、世代の異なりはゆるやかなソトの関係を生み出す。その結果、尊敬語使用の別のファクターである年齢の上下関係が顕在化し、父親が尊敬語の対象とされる。一方、大家族制地域では、世代が異なってもウチに止まるとともに家族内での年齢関係はあまり機能せず、父親は原則として尊敬語の対象とはならない。このことは、民俗学で考えられてきた年齢階梯制社会(西日本)と同族集団社会(東日本)というとらえかた(宮本 1984:53)と矛盾しない。以上のように、待遇表現をとらえるには、詳細な方言情報とともに、それぞれの地域が持つ社会構造なども合わせて検討することが求められることになる。

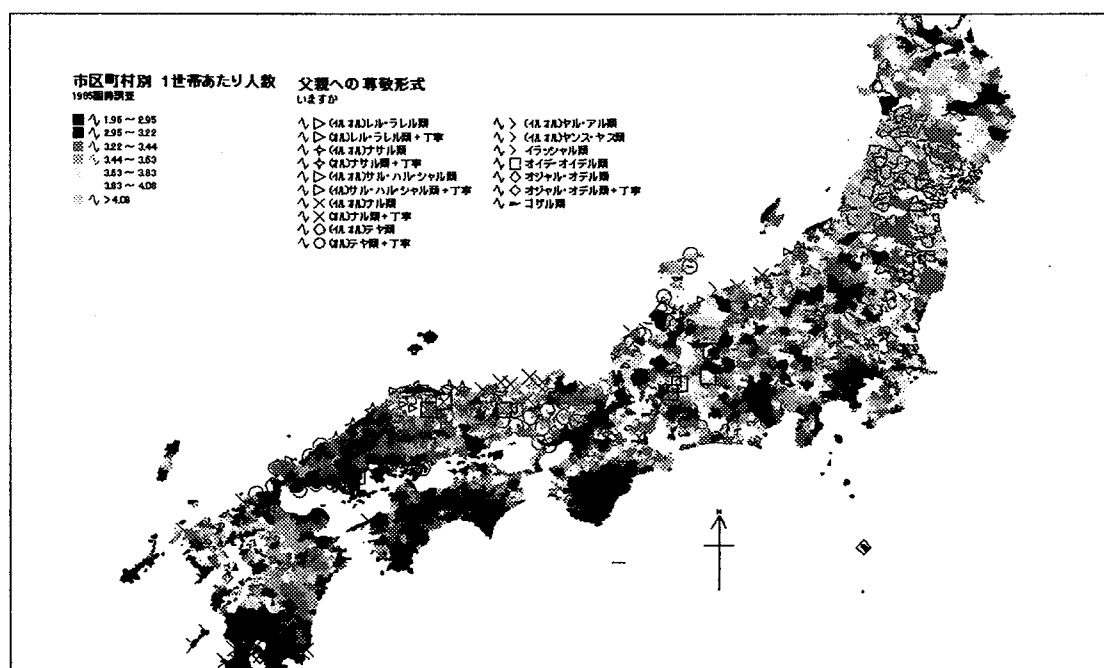


図5 父親への尊敬語と1世帯あたりの人数(世帯人数)

7. 配列モデルの再検討

言語外情報との照合を通して方言情報を検討することで、配列モデルだけでは見えないことが明らかになってきた。もっとも、これは配列モデルそのものを否定していない。一方で配列モデルは、あくまでも仮説であることには留意したい。文化的中心地から周辺に拡散するというのは、まだ証明されていない仮説である。これを実証するためには、経年的に分布を観察し続けるほかない。確かにこれはかなりの事業である。しかし、観察を通して、はじめてモデルは証明される。また、もし証明されなかったとしても、けっして無益に終わることはなく、必ずや別の理論が帰納的に構築されるはずである。

8. むすび

方言分布の解明に向けて、何が求められるかを述べてきた。GIS を通して諸種の地理情報をおおいに活用すべき時期を方言学は迎えている。そこでは古典的理論ともいべき配列モデルのみに依存しない、対象とする方言分布同様に、多様なアプローチがあるべきだ。同時に、いずれの取り組みにせよ、静的なデータに基づく考察は、解釈である。それらは、経年的観察を通して実証されるものであることを忘れてはならない。

注 1 もっとも柴田(1954)は早くから対象から外す必然性の少ないことを指摘している。

注 2 GAJ をベースにした小林(2004)、日高(2005)、三井(2003)などが代表的な研究である。

注 3 配列モデルの適否は、分布のありかたにも依存する。古くからよく知られる東西対立のようなタイプには、配列モデルはうまく適用できない。

注 4 ここで考察対象とする小家族制地域は、非大都市部である。大都市も核家族が多く、世帯人数が少ないという点で、数値上、非大都市部の小家族制と区別がなされないが、相互の家族制度にかなり異なりがあると考えられる。これらの区分は、課題である。

参考文献

- 小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』(ひつじ書房)
柴田武(1954)「方言調査法」『日本方言学』(東条操編, 吉川弘文館)
柴田武(1969)『言語地理学の方法』(筑摩書房)
徳川宗賢(1972)「ことばの地理的伝播速度など」『現代言語学』(三省堂, 徳川 1993 に再録)
徳川宗賢(1979)「これからの言語地理学」『国語学』119(徳川 1993 に再録)
徳川宗賢(1993)『方言地理学の展開』(ひつじ書房)
西村嘉助(1954)「家族人口の分布」『広島大学文学部紀要』6
日高水穂(2005)「方言における文法化—東北方言の文法化の地域差をめぐって—」『日本語の研究』1-3
馬瀬良雄(1969)「学区と方言」『国語学』77(馬瀬 1992 に再録)
馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』(桜楓社)
三井はるみ(2003)「極限のとりたての地理的変異」『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異—』(沼田善子・野田尚史編, くろしお出版)
宮本常一(1984)『忘れられた日本人』(岩波文庫)
柳田国男(1930)『蝸牛考』(刀江書院)